

大津港において30分でバスとギルを釣る

琵琶湖博物館うおの会 中村 聡一

琵琶湖汽船では5年前から「ぐるっと琵琶湖一周クルーズ」として高速船で、大津港を出て沖島(上陸)、沖の白石、多景島、竹生島(上陸)の4島をめくり、長浜まで行って帰ってくるという観光航路を基本土日祝日に運用している。そのクルーズでは琵琶湖の景色を楽しんでもらうのがもちろん第一なのだが、琵琶湖のヨシからできたヨシ笛の演奏や、簡単なヨシ工作などでも楽しんでもらうように、また、琵琶湖のことをもっと知ってもらうために講師の話(30分)もプログラムとして用意し、朝9時半から夕方17時過ぎまで丸一日過ごしてもらうというものである。筆者は講師の役を6名の先生方とともに務め、魚の話をしている。とはいえ、一般の観光客が対象なので、魚の現物をペットボトルなどに入れて持って行き、それを見てもらいながら出来るだけわかりやすい話をするようにしている。そのハイライトの一つとして活きた外来魚を見せながらオオクチバスとブルーギルがなぜ悪いのかを説明している。そのために、毎回、大津港の船着場の近くで釣りによってバスギルを確保するように努力している。ただ、冬場などボウズが予想されるときのために凍結した魚を持参して最低限、生の魚を見てもらうようにしている。

9時半の出航までの30~50分でバスギルの両方を確保するのは、簡単なときには5分もかからず達成できたが、いつもとなるとかなり難しかった。釣獲の方法としては、まず最初に餌は生きエビを用い、見えバスを探して狙った。藻の陰などに単独でいるバスはほぼ全部釣れた。しかし、大津港ではほとんどの場合ギルが多く群れていたのも、まずミミズでギルを釣りながら寄せて、バスを狙った。ギルが入れ食いモードになってもそれにつられてバスが釣れることはなかった。魚が浮いていないときは、壁際や深みを誘いながら探った。

2008年7月から2009年11月にかけて40回船での講師をしたうち、大津港では33回で、バスは16回(48.5%)、ギルは30回(90.9%)確保できた。また、長浜港スタートが3回あり、両種とも全て確保できた。2009年1~3月の4回は温排水の出る総門川で釣ったが、ギルだけは釣れた。

大津港ではバサーが多く、バスはおろかギルまでもスレていて中サイズ以上のギルを確保するのも一苦労であった。それでもバスは狙い撃ちでかなりの確率で釣れたので、駆除に応用できるであろう。